

主 題：私たちは主を宣べ伝える3

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章22-25節

救いは神の恵みによる、人間の知恵によるのではない。19節からパウロがそのことを教え続けています。きょう私たちは1コリント1：22から学んでいくのですが、いま一度このパウロのメッセージに耳を傾けたいと思います。

A. 神の恵みによる救い：知恵によるのではなかった 19-25節

1. 「人の知恵に対する神の裁定」 19-20節

パウロはこの箇所で私たちは神の恵みによって救われるのだということを改めて教えました。人間の知恵によって救いにあずかるのではないということ、人間の知恵がいかに空しく、いかに愚かなものであるかを教えました。

◎ 人の知恵は神の前では愚かで空しい二つの理由

その理由として我々は二つのことを見ることができます。

① 人間の知恵は私たちに最も必要な罪の赦しをもたらさないから

私たち人間に一番必要なのは私たちの罪が赦されることです。でなければ、永遠のさばきに向かっていくのです。人間の知恵は、我々にとって最も大切な罪の赦し、救いというものを私たちにもたらしません。どんなに知恵があっても、人間の知恵は私たちを創造主なるまことの神のところに導いていきません。だから、世の知恵、人間の知恵は空しいのだとパウロは言います。

② それは神が定められた救いの道ではないから

人間の知恵によって救いにあずかる、それは神の道ではない。神は全く別の道を私たちのために備えただけだと教えます。

2. 「人の知恵は救いの障害」 21節

21節のみことばを直訳すると、「なぜなら神の知恵において、この世はその知恵によって神を知ることがない。(私たちが宣べ伝える)メッセージの愚かさを通して信じる者を救うことを神が喜ばれた」となります。余りきれいな日本語ではありませんが、言いたいことはこういうことだということをお聞きください。

この中で「みこころによって……定められた」と訳されている動詞は「意にかなう」とか「お喜びになられた」、「大変満足された」といった意味を持ったことばでした。では一体神は何をお喜びになられたのか、何に対して大変満足をされたのか、何が意にかなったことばであったのか、それがこの箇所に書かれていたのです。それは「宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救う」ことです。このことに神は満足された、これが神の意にかなったことばであったと。「宣教のことばの愚かさを通して」というのは、私たちがそのように思うのではありません。神の福音を聞いた多くの人たちがそのように思うのです。なぜイエス・キリストを信じる信仰によってすべての罪が赦されるのか、ばからしい、そんな単純なメッセージで……と。人はいろいろな反応をするのですが、本質的にはこの福音のメッセージを歓迎しないのです。でもパウロが私たちに教えてくれるように、たとえ人々がこの福音のメッセージを聞いてそれが愚かであるとか、くだらないと言ったとしても、神はこのメッセージをお用いになられて救いのみわざをなされた。それが神のご計画だと。信じる者を救おうと定められたのです。このイエス・キリストの福音を信じる者を神は例外なくすべてお救いになると。それを神がお喜びになられた。それが神の意にかなったことであると、そのようにパウロが教えてくれるのです。

「信じる者を救う」、この救うという動詞が現在形なのは、この働きは今も継続して続いているからです。2000年前の時代だけではない。今の時代においても、どこの場所においても、だれであったとしても、どんな罪人と世間から言われたとしても、イエス・キリストの福音を信じるならば、その信仰によってその人は永遠に完全に救いにあずかるのです。

3. 「救いはキリストのみによる」 22-25節

こうしてパウロは救いというのは人間の知恵によるのではないということを教え、次に、救いはキリストのみによって与えられるものであると教えます。それがきょう私たちが見て行く22-25節までに記されていることです。

22-23節「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、パウロはこの中でまず最初に「しるし」と「知恵」の無力さ、空しさを教えようとします。なぜかという、ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求するからです。どちらも神の前で空しいのだとパウロは

言います。

1) 「しるしの無力さ」 22節

確かに聖書に記されているユダヤ人の特徴は主に「しるし」を求め続けた、つまり主に奇跡を求め続けることでした。例えばマタイ12:22で悪霊に憑かれて目も見えず口も利けない人が主イエス・キリストのもとに連れて来られました。そしてイエス様は彼を完全に癒された。彼は「ものを言い、目も見えるようになった。」と。その光景を見た人々がマタイ12:38でこんなことを言っています。「そのとき、律法学者、パリサイ人たちのうちのある者がイエスに答えて言った。『先生。私たちは、あなたからしるしを見せていただきたいのです。』、彼らは主イエス・キリストがなされた奇跡のみわざをもう見たにもかかわらず「しるしを見せて」くださいと言います。並行箇所ルカ11:16では「また、イエスをためそうとして、彼に天からのしるしを求める者もいた。」と書いてあります。彼らは「しるし」を求めるだけでそれを見て信じることもなかったのです。彼らは同じことを繰り返しています。

・「38年間病気で苦しんでいた人のいやし」 ヨハネ5:1-8(16、18)

ヨハネの福音書の中に幾つかの奇跡が出てくるので、ご一緒に見ていきたいと思えます。ヨハネ5:1、ベテスダの池というところでイエス様が38年間、病で苦しんでいた人物を癒されました。天使が下りてきてその池の水をかき混ぜた時に、そこに最初に入っていったら癒されると彼らは信じていました。この人は38年間癒されることを願いながらその池に第一番で入ることができなかったのです。

16節、この人物が癒されたことを知ったユダヤ人たちは「イエスを迫害した。」と書いてあります。ヨハネ5:16です。なぜかという「イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである。」とあります。安息日であろうとなかろうと、癒しを求める者たちに癒しを与えられたのです。ユダヤ人たちはイエス・キリストを信じようとはしませんでした。18節「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。」とあります。確かに「しるし」、奇跡を見たのです。でも彼らは信じることはなく、イエスは安息日を守っていないからと、かえってイエスを殺そうとしている。

・「盲人のいやし」 ヨハネ9:1-7(9:16、24)

ヨハネ9章には生まれつき目の見えないひとりの人物の話が出てきます。この人はイエス様がつばをもって泥を作られ、その泥を目に塗っていただいた。彼は「行ってシロアムの池で洗いなさい」と言われ、そのとおりすると癒しを経験した。物が見えるようになった。そのイエス様とのやり取りがここに記されているのですが、16節を見ると、「すると、パリサイ人の中のある人々が、『その人は神から出たのではない。』、「その人」とはイエス様のことです。「安息日を守らないからだ。』と言った。」と、同じことが繰り返されています。24節には「そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。『神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人を罪人であることを知っているのだ。』」と。彼が主張したことは、私に一つだけ言えると。それは私はかつて盲目で見えなかったが、今は見える。この私を癒してくださったお方がイエス様だと。彼らはこのような奇跡を目撃しても、そのような使徒の証を聞いても信じない様子が記されています。

・「ラザロの復活」 ヨハネ11(47-48、53)

もう一つの奇跡は、ラザロが死からよみがえってきた時の話です。11章に出てきます。主イエス・キリストは墓の中に入って4日もたったラザロを死からよみがえらせてくるのです。ヨハネ11:47からを見ると、「そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を召集して言った。『われわれは何をしているのか。あの人が多くをしるしを行なっているというのに。』、ちゃんと認めているのです。イエス・キリストが数々の奇跡を行っていることを。48節「もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。』」と。53節にもこうあります。「そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。」と。

「しるし」を見せてくれ、見たら信じる。奇跡を見せてくれ、そうしたら信じる。残念ながら、見た人たちが信じたわけではありません。信じたくない人は何があっても信じない。ヨハネ2章に非常に興味深い話が記されているので最後にそれだけ見たいと思えます。イエス様が過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたことが「イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、」とヨハネ2:23に記されています。そして「過越の祭りの祝い」のために多くの人々がエルサレムに集まって来ていました。その後、「イエスの行なわれたしるしを見て、」とあります。この「しるし」という名詞は複数形です。ですからたくさんの「しるし」、たくさんの奇跡をイエス様がこの時になされていたことをこの箇所は教えてくれます。人々はそれを見て「御名を信じた。」とあります。この「信じた」ということばは、24節「しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。」の「お任せにな」ということばと同じギリシャ語が使われています。どちらも「信じる」とか「信頼する」という意味です。ですから人々はイエス・キリストのなされるいろいろな奇跡を見て「信じた」と言ったのですが、イエス様は彼らのことを信じなかったと言っているのです。それは24-25節「なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであ

り、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかった」と。ここに書かれてあるように、イエス様は人の心をごらんになっておられたのです。人々が何を言うかではないのです。人々が何を考えているのか、どんな思いを持っておられるのか、主はひとりひとりの心をご存じです。だからイエス様を「信じた」と言っても、イエス様は彼らを信じなかった。なぜならイエス様は彼らの心をご存じであり、彼らが主を求めていなかったことをご存じだったのです。

ですから、私たちは心をご覧になっておられる神が私のことをどうぞ覧になっておられるのかをしっかりと覚えることが必要です。次回、もう少し詳しく見ていきますが、救いというのは私たちを全く新しく造りかえる神のみわざです。自分勝手に自分は救われていると思っただけであつたら、これは大変悲しいことです。神様があなたのうちに働き、あなたを救いへと導かれたのだったらあなたはそれがわかります。周りの人々もそれがわかります。なぜなら神がその人のうちに働きを始められたからです。ここに書かれてあつたように、確かにユダヤ人たちは「しるし」を求めました。でもイエス様は彼らの前に常に「しるし」をなされたわけではありません。なぜかという、彼らの心を知っていたからです。もし本当に彼らが真理を求めていたならば、イエス様はそのためにみわざをなされたでしょう。ヨハネの福音書の中には七つしか奇跡が出てきていません。イエス・キリストが死からよみがえって来られた奇跡のみわざを見ても人々は信じない。繰り返しますけれども、罪人というのは、信じたくない者は何があつても信じないのです。その中に私たちもいたのです。でもそんな私たちを神が救ってくださったのです。

2) 「知恵の無力さ」 22節

きょうのテキストに戻ると、パウロは「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求」と。同じことを繰り返すのですが、この「知恵」に関してパークレーが非常におもしろいコメントを記しているので紹介します。「このソフィスト（「ソフィア＝知恵」を持った人）というギリシヤ語は、もともと、良い意味における賢者を意味することばであつたのだが、やがて話のうまい小利口な人間、精神的軽業師、「なるほど」と思わせるしゃれたせりふで黒を白と言いくるめる人間、を意味するようになった。重箱の隅を楊枝でほじくするような議論を何時間でもやる人、問題の解決に関心があるのではなく、ただ「精神的散歩」を楽しんでいるだけの人、巧妙な機知とさわやかな弁舌を誇り、聴衆の喝采を浴びて得意になっている人、これがソフィストと言われる人種であつた。」と。彼らは人々からの喝采だけを求めたのです。自分たちの知恵を見せびらかすことによって自分たちを称賛するようにと。こういう知恵に希望はありません。こういう知恵をどれだけ身につけたとしてもそこに救いはありません。パウロはそのことを重々知っていました。

パウロがアテネのアレオパゴスにあつて説教をした時のこと（使徒17：18－32）を我々はもう何度か見てきましたが、そこにエピクロス派とストア派の哲学者たちがいたと。道理で彼らがパウロの福音のメッセージを聞いた時にそのメッセージをばかにした理由がわかります。この福音のメッセージは彼らの知的好奇心を満足させるものではなかつたからです。だから彼らは復活の話を聞いた時、またそれはいつか聞くことにしようと言ってその場を去っていった。人間の知恵は、我々を救いへと導かない。でも感謝なことに、その中にあつてもパウロは福音を語り、そしてデオヌシオというアレオパゴスの裁判官が信仰に導かれたことが記されています。（使徒17：34）

3) 「キリストの知恵と力」 23－25節

だからその後パウロはこう言います。たとえ「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求し」ても我々はそれにこたえようとするのではない、23節「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」、これがパウロの覚悟です。力強い宣言です。どういう人に対しても私のメッセージは決まっている、私はこのメッセージを語り続けると。それは「十字架につけられたキリストを宣べ伝える」と。

(1) つまづきであるキリスト：「十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです」 23節

ここに「ユダヤ人にとってはつまづき、異邦人にとっては愚かでしょうが」と記されています。ここに記されている人々というのは救いを拒んでいる人々を指しています。ある人はユダヤ人と同じように証拠を見せてくれと言うでしょう。またある人は先ほども見たように福音のメッセージをばかにしてあざけるかもしれない。国籍や人種、性別、年齢に関係なく、救いを拒み続けている人は同じような反応をします。しかし、相手の要求が何であれ、たとえあざけられようとパウロは常に「十字架につけられたキリストを宣べ伝え」た。このメッセージを彼は変えませんでした。「十字架につけられたキリスト」というのはイエス・キリストがあなたや私の身代わりとなって死んでくださったことを語り続けたのです。それが彼のメッセージでした。

「キリストを宣べ伝える」の「宣べ伝える」という動詞もパウロはあえて現在形を使っています。この福音のメッセージを私は言い広め続けたと。この福音を宣伝し続けたと。この福音のメッセージを人々に告げ知らせ続けたと。なぜなら前回も見たように、パウロがこのメッセージを自分で編み出したのでは

なくて、考え出したのではなくて、これは神ご自身からいただいたメッセージだと。この福音のメッセージこそ神が意図されているのです。この福音のメッセージによって神は信じる者を救おうとされた。これが神様のご意思なのです。このメッセージこそが人々に語り続けていかなければいけないメッセージ。このメッセージこそが人々にとって必要なメッセージなのです。ということは、パウロだけではない。あなたにとっても私にとってもこのメッセージは語り続けていかなければいけないメッセージです。私たちが先に救われたのは、このメッセージを知らない人たちにこのメッセージを伝えていくためです。たとえ人々がこのメッセージを聞いて、それは愚かとしか思えなくても、我々はこれを語り続けるのですが、我々はこのメッセージを生きる責任もあるということをこの後、パウロは私たちに教えてくれます。

・ユダヤ人にとってどうして福音は「つまずき」なのか。 申命記 21 : 23、イザヤ 53 : 5

23節「異邦人にとっては愚かでしょうが、」とあります。確かにこういう反応があるということは我々既に見てきました。皆さんに注目していただきたいのは、「ユダヤ人にとってはつまずき、」と書いてあります。なぜこの福音のメッセージが「ユダヤ人にとってはつまずき」なのかと言うと、それは十字架に架けられる人は呪われた者だと聖書が教えているからです。実は申命記 21 : 23に「その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。」と確かに書かれているからです。そこで救いを拒み続けている多くのユダヤ人たちは十字架で死なれた主イエスは「のろわれた者」なのだから、神、または救い主であるはずがないと。ユダヤ人にとって十字架は福音を信じる上での「つまずき」だったのです。十字架に架けられた、木に架けられた「のろわれた者」がなぜ神なのか——。なぜ「のろわれた者」が私たちを罪から救うことができるのか——。こうして彼らはこの救いを受け入れることがなかったのです。

彼らの問題

① 都合の悪い預言のメッセージを無視している

一つは自分たちにとって都合のよい聖書の箇所はしっかりと覚えるのですが、都合の悪いところは完全に無視するのです。なぜなら旧約聖書には約束の救世主が我々の身代わりとなって死んでくださることが預言されていた。それはもうクリスチャンであればみんな知っています。イザヤ 53 : 5に「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。」と記されています。ですから、聖書を見ているならば、救世主が来ることだけではない。救世主がどのようにして私たちのために救いを成し遂げていかれるのかもわかったはずです。来て、救いを宣言するのではない。この約束の救世主は私たちの罪の身代わりにご自身のいのちを犠牲にされること、その死をもって救いをもたらすことが書かれています。でも彼らはこの聖書の預言のメッセージを全く無視するのです。ですから木に架かったイエス様を見た時に、これは「のろわれた者」だから救い主ではないと、彼らは神の約束を完全に無視するのです。

② 申命記のみことばを正しく理解していない

もう一つ言えることは、彼らは申命記のみことばを正しく理解していなかったのです。彼らはイエス・キリストの十字架を申命記の中でモーセが教えたことと重ねて見るのです。モーセたちの時代において、こうして木に架けられて処刑されるということはなかったのです。処刑された後に木に吊るされたのです。その犯罪人を木に吊るすことによって、人々にこのような罪を犯してはならないという警告を与えるための見せしめだったのです。しかもこのからだはいつまでも吊るしておいていいわけではなくて、その日のうちに埋葬しなければいけないと申命記 21 : 23が教えています。犯罪人が神ののろいのもとにあるのは、木に吊るされたからではなかったのです。神の命令に逆らって死に値する罪を犯したからのろわれていたのです。でも彼らは、木に吊るされているからのろわれていると思ったのです。本当ならば木に吊るされた人を見て、彼らが覚えなければいけなかったのは自分自身を戒めることだったのです。私はこのような罪を犯していないかどうか——。なぜならそれがこのモーセの教えだったのです。同じ罪を自分が犯さないようにと戒めることだったのです。でも、イエス様の十字架を見たユダヤ人たちは、もちろんユダヤ人だけではありませんが、特にこの旧約のみことばを知っていた者たちは自分を戒めることをしなかったのです。イエスを見て木に架けられた人間はのろわれた者、だから彼は神でもなければ、救い主でもない。本来ならば十字架を見た時に、彼らが気づくべきことは自分自身がこの十字架に架かって処刑されるに値する人間だということだったのです。

また同時に主イエス・キリストが裁判官によってさばかれて調べられたにもかかわらず、何一つ十字架に値する罪がないと宣言されたのに、人々は十字架に架けろと言った。しかも罪のないお方がみずから進んで十字架に架かっていったと。そのイエス・キリストの十字架を見た時に、彼らが思わなければいけなかったことは、こんな私のために示してくださった主イエス・キリストの愛の大きさです。なぜならこの罪のないお方が私ののろいをその身に受けてくださったからです。ですからイエス様の十字架を見上げた人々は、本来ならばイエス・キリストをさばくのではなくて、私は神の前に神ののろいを受

けるような、神の命令に反することを犯していないかどうか、そのことを吟味すべきです。同時にイエス・キリストを見た時に、なぜこの方が十字架に架かっているのか——。調べても調べても罪一つ見つからない方がなぜ自分から十字架に架かっているのか——。この方は約束の救世主であり、この方が十字架にお架かりになったのはあのイザヤが約束していたとおりでであると。そしてこの方は十字架で私の上に乗っていた神ののろいを身代わりとなって受けてくださったのだと。彼をさばくどころか、彼を批判するどころか、彼に感謝をすべきだと。

しかし、悲しい現実本来ならこのみことばを知っているはずの多くのユダヤ人たちがみことばのすべてを正しく理解しようとしていなかったゆえに、このイエス・キリストの十字架につまづいたので。また申命記のみことばを見ても、正しくそのみことばを理解しなかったゆえに、彼らはイエスの十字架を見て、神が備えてくださった完全な救いを受け入れることがなかった。十字架につまづいたので。パウロはそのことを言うのです。悲劇です。ですからユダヤ人であろうと、異邦人であろうと、だれであろうと、パウロは十字架につけられたイエス・キリストを宣べ伝え続けると。キリストの十字架はあなたの罪の身代わりだと、あなたを罪から救い出すためにイエス様は十字架で死んでくださった。そのメッセージを語り続けた。繰り返しますが、それがあなたや私へのメッセージです。どうやってイエス・キリストが本当の救い主だと言えるのですか？証拠は？ありますよ。イエス・キリストは敢然と三日後に死からよみがえってきた。これが証拠です。この方は確かに人となられた神であり、私たちのために約束されていた唯一まことの救世主です。この方によって、この方を信じる信仰によって、信じるすべての人の罪はその時に神によって赦していただける。これが神様のあなたへのメッセージです。

(2) 真の救い主キリスト 24-25節

さて、この24-25節で、人々にとってはつまずきであるかもしれないキリスト、でもこのお方は真のまことの救い主なるキリストであるとパウロは言うのです。24-25節「しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」と。

まず最初にパウロは「召された者にとっては」と記しています。この「召され」ということについて私たちは次回もう少し詳しく学んでいきますが、「召された者」というのは神によって招かれた者、あなたの話です。この救いにあずかったあなたは神が直接的に、個人的にご自身のもとへと招いてくださった。私たちは当初福音を聞いてもそれに感動することもなかった。いろいろな思いがあったでしょう。でも多くの皆さんがそれを心から歓迎してこなかったはずですが、そうでない人もおられるでしょうが、ほとんどの皆さんが福音のメッセージを聞いてもそのすばらしさがわからない。でもイエス様を信じた後、その福音のメッセージのすばらしさに改めて感動を覚えるのです。パウロは言うのです。あなたがこの救いにあずかったのはあなたに知恵があるからでもないし、あなたに力があるからでもない。神があなたを召してくださったから、神があなたに直接的には働いて、あなたを救いへと導いてくださったから。ですから救いが神の恵みなのだということを改めてパウロは教えるのです。

そして「召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」とパウロは言います。この24-25節を見ると、「神の力、神の知恵」と人間の力、人間の知恵の二つが対比されています。24節に「キリストは神の力、神の知恵」だと。なぜこんなふうにパウロが言ったかということ、キリストによってのみ我々に最も必要な罪の赦しを得ることが出来るからです。キリストには罪の赦しをもたらす力があるとパウロは言うのです。多くの人たちはそれを信じない。だから福音のメッセージを聞いてもそれを信じようとしません。でも、召されてこの救いにあずかったあなたは、確かにイエス・キリストは罪を完全に永遠に赦すことができる力がおありだということを確認しておられるはず。なぜならあなたの罪が赦されたからです。

①「神の知恵」

また、「パウロは、キリストによって備えられた救いは私たちの知性を遥かに超えた、そこには「神の知恵」が満ちあふれたものであると言います。旧約聖書から私たちがこの神の救いを見て行く時に、余りにもそこに「神の知恵」があることに驚かされます。創世記の初めから神は私たちに救いの話をされました。なぜなら人間が神に逆らうという選択をしたからです。罪を犯したからです。アダムとエバが追放される時も、罪を覆うためにはいけにえが必要であること、後に神は罪を赦していただくために人々にいけにえを捧げることを命じました。でもみんな気づいたことは、このいけにえは私を永遠に罪から解放するものではない。だから彼らは繰り返しいけにえを捧げなければいけなかった。そのことを通して人々は学んだのです。いつか神が完全ないけにえを送ってくださると。約束の救世主が来てくださる。その時にもう私たちはこうして繰り返し罪の赦しを問いつける必要はないと。だからイエス様がお見えになった時に、ヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」と言ったのです。救世主が来られたのです。私たちの罪を完全に我々から永遠に拭い去ってくださる救世主、「神の小羊」が来てくださった

と。人間が祭司の前に持って行って、自分の身代わりに殺し、罪の赦しをもらっていた動物の子羊の血は我々のいのちを、我々自身を完全にすることはできなかった。でもこの神の備えてくださる小羊は一度捧げられることにより、完全に永遠に救いを備えてくださった。

私たち人間は自分で自分を救うことができないゆえに、神が人として来てくださり、そしてあなたのすべての罪を負って十字架で死んでくださり、その死後三日後によみがえってくださった。だれがこんなこと考えつきます？このことを通して神はご自身の属性を守られたのです。神は愛にあふれた方であり、神は完全に聖い方であるゆえに、罪はどんな罪でもさばく。ですからイエス様の十字架を見た時に、私たちは我々をお造りになった神はすべてにおいて完全に聖いお方であると。罪を憎んでおられ、罪に対するさばきがあること。同時にイエス様の十字架を見た時にそこに私たちはこんな罪深い者を愛してくださる神の愛を見るのです。だれがこんなことを思いつきます？イエス・キリストの十字架を見る時に、この神が備えてくださった救いを見る時に、私たちはそこに「**神の知恵**」を見るのです。私たちが想像もできない、思いつくこともない。ですからこうしてパウロは「**神の知恵**」と人間の知恵とを比較しながら、人間の知恵というのは、我々人間に本当の必要をもたらすことはない。どんなに知恵があったとしても、人々からの称賛を得たとしても、知恵はあなたの心の渇きを満たすことはない。知恵はあなたに本当の幸せや満足をもたらすことはないと教えます。

また人間の知恵というのは、この神の真理を理解することはできないのです。ですから私たちがこのみことばを読んでも、自分に都合のよいみことばを選ぶかもしれない。みことばを見ていて励まされると言うかもしれない。みことばに記されている真理は人間の知恵では理解できないのです。我々には神の助けが必要なのです。人間の知恵には確かに限界がある。でも「**神の知恵**」はあなたの本当の必要をあなたに与えてくださる。何が必要なのか——。どうすればあなた自身が本当の心の満足を得ることができるのか——。どうすればあなたがこの地上にあって本当の神だけが与えることのできる幸せを体験できるのかと。

②「**神の力**」

同じように25節になると、今度は「**神の力**」と人間の力が対比されています。説明するまでもなく私たち人間の力というのは完全ではない。あなた自身であなたを変えることはできません。でも「**神の力**」はあなたを完全に生まれ変わらせることができる。「**神の力**」はあなたを造りかえることができる。ですからパウロが言います。神の中に私たちが言うような「**愚かさ**」というのはゼロです。でもあえて神に「**愚かさ**」があると言うならば、その「**神の愚かさ**」は人間のどんな最高の知恵よりもはるかに優れたものだ。また、神に「**弱さ**」はありません。でももしあると考えて、神に「**弱さ**」があるとしたら、その「**神の弱さ**」と人間の最高の力を比較するならば、比較することもできない。こうしてパウロが言いたいことは、いかに人間と神とが違うかということです。私たちの知恵や力を「**神の知恵**」と「**力**」と比較しようとする事自体、大変な罪です。どれほど愚かなことかです。

・「**ヨブが神について**」 ヨブ9：4、12：13

ヨブがヨブ9：4で「**神は心に知恵のある方、力の強い方。**」と言います。またヨブ12：13には「**知恵と力とは神とともにあり、思慮と英知も神のものだ。**」と。この「**思慮**」というのは「**計画**」や「**助言**」という意味です。「**英知**」というのは「**解釈**」や「**理解**」という意味です。神だけがすべてのことをご存じだと。だからこそ神は私たちに必要な導きを与えてくださると。一体この神と我々のような人間を比較するのは誰かと。

・「**パウロも神について**」 ローマ16：27、1コリント2：9（イザヤ64：4）

ローマ16：27でパウロは神のことをこんなふうに言っています。「**知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。**」と。知恵に富んだお方であると、パウロは神のことを表しています。まず「**神の知恵**」は神の創造によって証明されます。神がお造りになったこの自然界を見るなら、私たちはそこに「**神の知恵**」を見ます。そしてまだまだ神がお造りになったものを我々理解できない。疑問が山ほどあります。なぜか——。「**知恵に富む唯一の神**」なのです。そして「**神の知恵**」は救いによって証明されます。神が救いを備えてくださり、神が私たちを選んでくださり、神が私たちを招いてくださり、この救いへと私たちを導いてくださった。まさにパウロが言ったように、「**目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。**」、1コリント2：9です。これはイザヤ64：4からの引用です。パウロは私たちに何を教えようとしたのでしょうか。パウロが言いたいことは、あなたがこの救いにあずかったのはあなたの知恵によるのではない、これはすべて神の恵みなのだ。神様の恵みによってあなたはこの救いに招かれたのだ。そのことを彼はいま一度コリントの兄弟たちに教えようとするのです。

そして私たちもそのことを知って、そのことを感謝して生きる者たちです。あなたも私も神の恵みに

よって救いにあずかったのです。そして、先ほども見たように、私たちにすばらしい神様から託されたものがあります。私たちは「十字架につけられたキリストを宣べ伝える」のです。これが我々に神様が託してくださった務めです。信仰者の皆さん、この務めをいただいた者としてその務めをしっかりと果たしていくことが私たちの責任です。なぜならばまだ多くの人々がこのメッセージを知らないからです。こんなすばらしい救い主がおられることも、このすばらしい救いがあることも知らずに永遠の滅びに向かっているからです。あなたや私の責任は私たちのメッセージを語るのではない。私の思うことを語るのではない。神がどんな思いを持ってひとりでも多くの罪人が立ち返ることを待っておられるのか、そのことを知っている者たちが、罪を悔い改めて神が備えてくださったすばらしい唯一の救いを受け入れなさい、この福音を信じる信仰によってすべての人の罪は完全に赦される、これが神が意図されたことであり、これが神がお喜びになったこと、これが神のあなたへのメッセージだと語ることです。この一週間もそれぞれのところで神の助けをいただきながらこのメッセージを語り続けていきましょう。